

平成 27 年 11 月 29 日 南陽市・東置賜郡医師会 市民公開講座

人生の最終段階における医療について考える

—患者の意思の尊重—

山形厚生病院（前三友堂病院地域緩和ケアサポートセンター長）

川村 博司

昨今、「患者中心の医療」が叫ばれています。これまでの医療が患者中心の医療ではないとすると、いったい何が足りなかったのでしょうか。医療の目標は、患者さんにとっても、ご家族にとっても、そして私たち医療者にとっても同じであり、患者さんの命を守ること、病気が治ること、治らない病気であったとしても、できるだけ苦痛が取り除かれることです。その目標に向かって、心にとめておかなければならないことは、診断や治療を進めていく上で、主役は医師ではなく患者さんであり、患者さんがすべての決定権を持っているということです。この認識を一人の患者さんに関わる全員が持つと言うことが必要であると考えます。関わる人々が患者さんのこの権限を発揮できるように支えること＝“患者の意思の尊重”が大事になってきます。

では、患者の意思を尊重した医療を実現するためには何が必要でしょうか。それは、病気のこと、現在の病状、そしてこれからどうなるのかということ、これらのことについて、主役である患者さんはもちろん、患者さんを支える人々全員が、正確に理解し、同じ認識を持つことです。患者の意思を尊重した医療の基本は、患者さん自身が自分の病気についてしっかり理解することです。認知障害などで、無念にも自律性が失われた場合であっても、代弁者であるご家族が正確に理解することです。一方で、説明する医師や看護師、薬剤師などの医療者側も、正確な説明を行う役割を果たさなければなりません。がんのような重大な病気に遭遇してしまった場合など、病気や病状、診断や治療、たとえば、手術を受けるのか受けないのか、抗がん剤治療を受けるのか受けないのか、そして未来のことについて、たとえ、マイナスの考えを持つことになったとしても、それを辛抱し、厳しい現実と冷静に対峙して自らの意思を決定し、いろいろな人の支えを得ながらその病気に向き合うことが、さまざまなストレスを克服して精一杯生きることにつながります。このことによって、患者さんの納得できる、満足の得られる医療に到達できるのではないのでしょうか。これが“人明かりに包まれた医療”なのです。

私たち医療者が“人明かりに包まれた医療”の実現に向けて努力し、ご家族も精一杯患者さんを支えることができれば、たとえ、治ることがなかったとしても、患者さんが最期を迎えたときに、「こんなにも皆に大切にされて自分は旅立っていくことができる」という思いを持つことができ、安らかに、穏やかに人生の幕を引くことができるのではないかと思います。